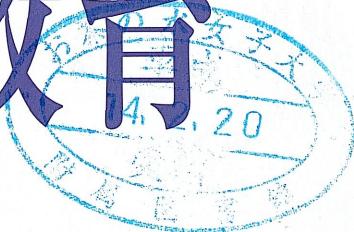


幼児の教育



家庭・保育所・幼稚園

2002年3月号



人気シリーズ 第5弾!!

最新刊

手づくり アンパンマンがいっぱい 5

通園グッズ

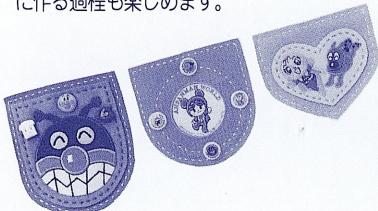
*保育者やお母さん方の感性を活かして、楽しんでつくれ、子どもにも喜ばれるものばかりです。

*原寸型紙（一部拡大必要あり）付で、作り方もイラストで紹介。見ているだけでも楽しく、つくればもっと楽しいものです。

*作品をカラーで紹介、見やすく読みやすい画面構成です。

*アンパンマンの楽しいキャラクターが、通園バッグやシューズ袋、お弁当袋、おひるねグッズ、手提げバッグ、帽子などなどについてきて、いっしょに登園。アンパンマンの元気パワーで、毎日の通園が一層楽しくなります。

*既成の素材をうまく活用して、簡単に手づくりできるものばかりですので、子どもと一緒に作る過程も楽しめます。



☆島田明美（しまだあけみ）

神奈川県生まれ。東京デザイナー学院卒。
ペーパークラフトなど造形活動中心のフリーランス
トレーナー。テレビ出演も多く、NHK「ひとりで
できるもん」、BS日テレ「それいけ！アンパンマンく
らぶ」などの工作コーナーに出演しています。

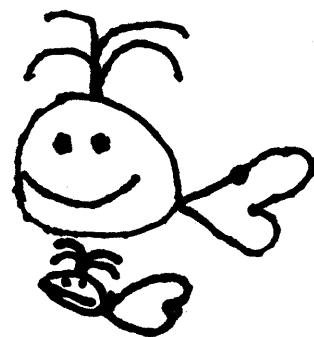
島田明美／著

A4判 96頁 定価：本体2,000円+税

キンダーブックの
フレーベル館

幼児の教育

第101巻 第3号

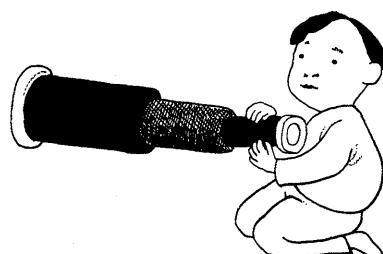


幼児の教育 目 次

第一〇一卷 第三号

- 悩める時代の母親たちを支援するとは(2) 田代 和美 (4)
- モンテッソーリ教育思想の誕生(3) 宮里 晓美 (20)
- 人類学研究と「生命の援助」 早田由美子 (12)
- 読むといふこと—自分のために— 永野むつみ (26)
- 耳をすまして 目をこらして(23) 宮里 晓美 (26)
- 変わるものと変わらないもの—進行中の歴史の中で— 津守 真 (28)

© 2002
日本幼稚園協会



育てられている時代に育てる」とを学ぶ(5)

—高校生を学びの主体とした「絵本読みあい実習」をとおした
自分づくりへのとりくみ— 金田 利子・百瀬 愛... (33)

ある日..... (46)

子育て支援の現場から .. .

子どもの友だち関係に悩む母親たち 吉川はる奈... (48)

絵本三昧 (2)絵本の伝え手の視点から 宮地 敏子... (53)

友だちのひろがりを願つて 吉岡 晶子... (58)

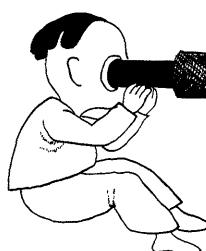
表紙絵／佐々木麻こ

扉題字／津守 真

扉カット／お茶の水女子大学附属幼稚園園児
カット／瀬永たたえ 「遠く」

扉カット／瀬永たたえ 「遠く」

編集委員／田代 和美・舛田 正子・高橋 陽子
編集部／仲 明子



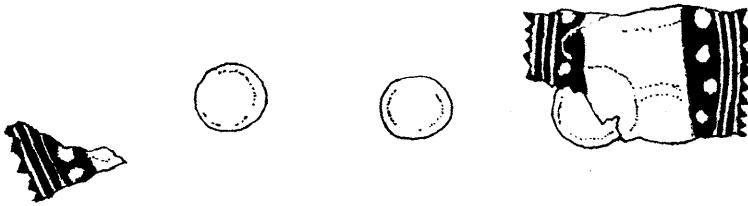
悩める時代の

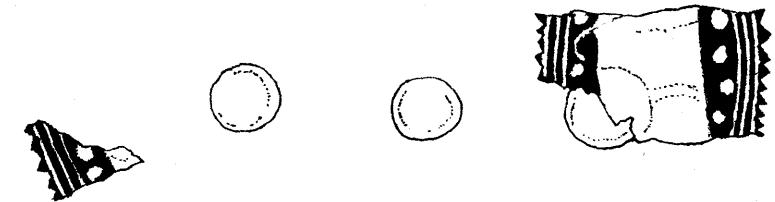
母親たちを支援するとは(2)

田代 和美

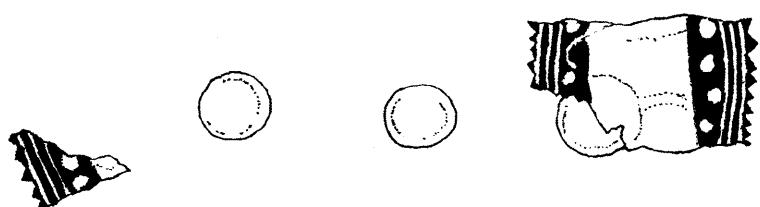
授業でテキストをもとに子どもの権利と体罰について学生にグループディスカッショングをしてもらつた。

給食を全部食べ終えるまで教室から出してもらえなかつた経験のある学生たちが、それがイヤな思い出として残つてゐるにもかかわらず、「でも嫌いな物でも少しでも食べられた方がいいと思う」と言う。そして翻つて、「子どもが少しでも食べられたら、そのことを評価してあげる」というような発言をする。眞面目な学生である。でもそこに危惧を覚える。子どもは先生の喜ぶ顔を見たさに頑張るの?「辛い経験もした方がいい。その方が人の痛みが分かるから」という発言もあつた。多分、自分自身





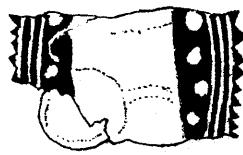
の経験を重ねて発言しているのだろうと思う。でも、自分が結果としてそうだったから、それでよいと一般化してしまってよいの？「親の体罰は、後のフォローがあるて、自分の事を思つてやつたのだと分かれば納得できるのではないか」という発言も多い。学生の条件付きで体罰を容認するかのような発言を聞くと、この人たちはよっぽどそういうことと無縁に育つってきたのか、それとも管理されることに慣れきつてしまつていて、今度は簡単に管理する側に回つてしまうのかと戸惑いもする。授業の中、私は何か噛み合わないと感じつつ、どうやつてこの状況を転回していいのか戸惑い、学生は学生で考えるほど分からなくなると言つた。授業が終わつた後も引っかかつたままの自分で、わからないまま考え続けてきたのだが、このような切り口で人間同士の事柄を考える事自体に限界があり、保育の中には馴染まないのではないかといふことに思い当つた。人権や体罰というくくりでの話は一般論になりがちだ。子どもの人権を認めましょう。体罰はいけません。虐待はむろん犯罪。一般論にすればそれで終わる。そしてそういう意識を持ちましょうで終わつてしまふ。でも……とどこかにそこにとどまれない気持ちが学生の発言の中からあふれてくるのは、一般論としてではなく、個別な関係性の中での経験に基づいて考えている、そこに具体的なだれかとの関係を想定しているからなのだろう。そういえば、おじいちゃんやおばあちゃんが逃げ場だつたことや親に寒空に放り出された時にコートと一緒に出された経



験が語られ、「こういう言葉が出てくるようになったのは、かつてあった何かがなく
なかつたからなのではないか」という発言もあつた。

かつてあつた何かを探し出しても単なる復古主義になつてしまい、現代には何ら意
味を見いだせないのかもしれない。でもかつてあつた何かがなくなつたことで新たな
言葉が生じてくるのだとしたら、新たな言葉の中身がそれと無関係に存在するのにお
かしな話であろう。

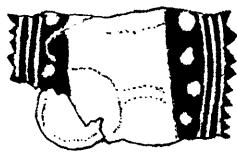
「しつけと体罰の境界線を定めるのが難しい」という発言もあつた。ここにもまた嘲
み合わない何かがあり、今の親たちの子育ての悩みを聞いていた時に相通じる違和感
を覚えた。子育てについて話す場では必ず「どの程度まで許していいのか」「どこか
ら禁じていいのか」という線引きを求められたり、「どうやってしつけたらいいのか」
というその部分だけを取り出してノウハウを求められて戸惑う事が多い。そんなの答
えられない。そこには学生たちと同じく、一般論で語れない自分がいる。自分の中で
はしつけとは、形や行為として外側から与えるものではないと考えている。人と人と
が一緒に生きていくためにどうしていくべきかを、日々の生活の中で必然性を
持つて感じ取っていく。そういう人間関係の中での積み重ねで身に付いていくものだ
と捉えている。そうすると、じゃあどうやってという一般的な方法論で片づけること
ができないくなる。



人権という言葉 자체が個としての人間に備わっているものであり、また体罰という言葉は力関係のベクトルが一方向に向いている。人権という言葉で子どもを保護すべき対象とのみ見なしたときには、既に子どもを管理すべき対象と見なす視点に転化し始めているのではないかとも思う。人権を否定しているのではない。もちろん体罰を肯定するものでもない。関係性が抜け落ちてしまいがちな視点の在り方に違和感を感じるのである。個を尊重することは関係性を断ち切ることとは違うはずだ。

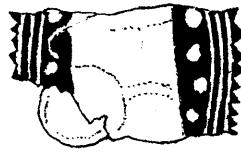
母親たちと集う場で語りを聞いている時にも、その語りに違和感を感じることがある。たとえば、子どもが生まれたことで一度仕事を辞め、いざれまた仕事に復帰したいと考えながら迷っている母親がいる。自分の仕事の力が落ちていく不安にさいなまれ一日でも早く仕事に復帰したいと考えている。でも彼女の母親が仕事で忙しく、小さい頃に夜中に目覚めた時に隣に母親がいなくてたまらなく寂しい思いをしたという。それが自分の中にトラウマとなつていて、思い出すだけで闇に引きずり込まれる思いがすると言う。仕事をしたい気持ちと自分の子どもに同じ思いをさせたくない思いの間で葛藤しているという。自分がそうだったから必ず自分の子どももそういうなると、なぜ決めてかかるのだろう。

子どもが生まれて仕事を辞めたものの、子育てが辛い。でも人に任せることはでき



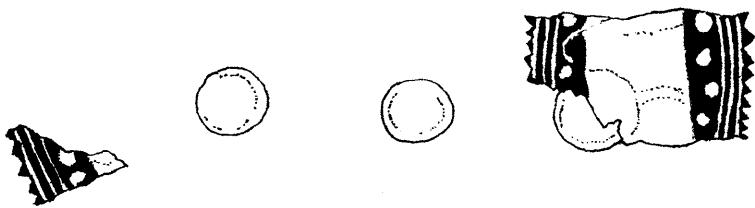
ないと話す母親がいる。その講座の間、別室で子どもの保育をしていて、申し込んでいたにもかかわらず、居ても立つてもいられずに、彼女は保育室から子どもを連れてきて、結局ぐずる子どもを抱っこしながら立つたり座つたりして講座に参加していた。子ども連れ自体は私は全くかまわないのだが、抱っこしながら「育児が辛くて、育児に関する本や心理学に関する本を沢山読んだ。自分がブレているからキツイのだということは分かつていて」と話す彼女の意識と行為に戸惑いを覚える。

初めは親が専門的な知識を語つたり、頭の中で考えたことばを語ること自体に自分が違和感を感じるのかと思ったのだが、結局はこういう語りの中では、子どもや周りの人との関係性が見えていないことに違和感を感じるのだと思う。守るべき存在の我が子である。自分の分身と感じる事もあるだろう。だから語る必要もないということなのかもしれないが、もっぱら自分自身のことを語っているのである。そのような場に集おうとする意志のある人は、意識が高くて語れる人々だからなのだろうか。またこのような語りは、乳児を育てている人に多いようにも思う。言葉のない赤ん坊との生活は、気がつくと今日は誰とも会話を交わしていないことさえあるような日々だ。話したいという切実な思いもあるだろう。しかしそのような生活の中で自身にだけ意識が向いていては、いくら専門的な本を読んで知識を身につけても、子どものいる生活を楽しむことにはつながっていかないだろう。



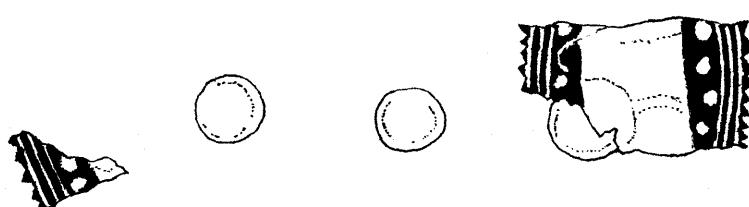
吉本隆明と理学療法士の三好春樹が対談している『『老い』の現在進行形』（春秋社、二〇〇〇年）という本の中に介護の世界の話が出てくるのだが、その中でボランティアと人権意識への疑問が述べられている。ボランティアは心優しく、意識の高い人が多い。だいたい大学出ている奥さんで、子育てが一段落してという人が多いのだが、人権意識を持つていて、「じいちゃん」とか「ばあちゃん」とか呼ぶと怒るのだという。「○○さん」と苗字で呼ばなくてはいけないと。だけど自分ことを孫だと思つておばあさんがいると「ばあちゃん」と言つた方がいいこともある。そういう状況判断能力が必要なのだと三好氏は言う。ここではまた、相手を客観的対象としてみて分析する近代的な方法論で周囲のみんなから客観的にばかり見られたら人間は普通かなわない、と述べられ、どうも大切なものがヒューマニズムとか人権とかいう言葉によつてなくなつてしまつたと述べられている。前記の学生の言葉に通じるものだ。

またこの本の中で吉本氏は「人格と呼んだらいいのか性格と呼んだらいいのか、心というふうに呼んだらいいのかわからないですが、万葉時代から人を好きになつてという部分は変わらないのではないか。つまり、そういう部分と、文明が発達して意識や、知識、見識も高くなつてということは関係ないのではないか」と述べ、知識もなにもなく、大工さんの親方だった自分の親がよく出来ていると思ったエピソードを話



している。そこから話は知識より無意識の豊かさという方向に進む。そして介護の場での相手との関係性について三好氏は「痴呆性老人とかかわる時に、心ここにあらずで、こうしなくてはいけないとおもつてやつてはいる」と絶対ダメです。目を合わせませんし、さつといなくなってしまう。だけど心を落ち着けてちゃんととかかわろうとし、むしろ意図性を捨てて、本人の前で目を合わせて、そこで生じた雰囲気にじぶんが動かされてというふうになつていくときに、はじめて何か通じる。意図性を持つてこういうことをしてやろうとおもつて、教科書に書いてあるとおりにやろうとしてもまたくダメです。呆け老人はみごとに見ぬさます」と述べる。

介護の場は、今専門化が進み、意識の高い専門職の養成が進んでいる。子育てと非常に似かよつた状況にあるようと思う。現代の子育ても意識的にこうすべきという所からスタートしていく、子どもがどういう反応をするにせよ、それを貫くことが横行している。しかし人権という言葉によつて大切なものがなくなつたのか、相手の様子を見てとか状況に応じてとか、そういうことが機能しなくなつた、つまり相手との関係の中で考えようとしないから、だから人権という言葉で身を守ることが必要になつてきているのか、どっちが先なのかは今の私にはわからない。また知識より無意識の豊かさといつてもどうやつて無意識の豊かさをはぐくむことができるのだろうかと私ははたと立ち止まつてしまつ。無意識の豊かさも「かつてあつた何か」のひとつなの



であろうか。それとも万葉時代から変わらないものなのだろうか。

子どもを持つことによって初めて親は親となる。第一子の子育てで不安が大きいのは、すべてが初めてだからだ。ある母親が言っていた。「一人目の子どもと一緒に親として育つていくのだ」と。自分一人で悩みを抱え込まないよう語ることも、誰かが聞いてあげて自分を責めて深刻化しないようにすることも、必要な時に子どもを預かってあげることも、必要な知識を教えてあげることも、時によっては具体的な方法論も、その時々で必要になることがある。でもそれはノウハウとして一人歩きするものでは決してなく、それらが集約していくところは、子どもとの関係の中にいる自分を実感してほしいという願いなのだと思う。無意識の豊かさはその実感とともに現代の私たちの中にも育てられるものだと思いたい。関係性に目覚めていくための手助けをすることが今現在の私にとっての子育てを支援することであり、そのための頼みの綱は目覚めさせてくれる子ども自身の存在でもある。

（お茶の水女子大学）

モンテッソーリ思想の誕生(3)

人類学研究と「生命の援助」

早田　由美子

人類学と観察する目

前回は、モンテッソーリの教育思想における知的障害児治療教育研究からの影響を見てきた。モンテッ

ソーリは人類学や生物学からも影響を受けた。この学問からは彼女の教育思想における基本的概念が創出されたと考えられる。そこで、今回は人類学からの影響について見ていただきたい。

モンテッソーリは、ローマ大学医学部在学中、人類学や民俗学も学び、一八九九年秋から一九〇八年まではローマの国立女子高等師範学校やローマ大学教育学部で衛生学や人類学の講師を務めた経験をもつ。ロー

マ大学での講義録は『教育学的人類学』（一九一〇）として刊行され、その中でさまざまな民族の男女や子どもの体格の特質が分析されているほか、教育の新しい方向が示されている。

モンテッソーリは同書の中でも、また、一九〇七年創立の「子どもの家」の教育について書いた『科学的教育学の方法』（一九〇九）の中でも、著名な三人の人類学者の業績を評価している。それは、犯罪人類学のロンブローネ（一八三五—一九〇九）、生理学的人類学のデ・ジヨヴァンニ（一八三八—一九一六）、教育学的人類学のセルジ（一八四一—一九三六）である。モンテッソーリは知的障害児治療教育のイタールやセガルの実践と思想から自分なりの発展を遂げたよう、この三人の主張を学びながら新たな思想の転換を図っている。

ロンブローネは犯人から動植物に至るまで多様で膨大な資料を収集し、犯罪者の身体的特徴に着目して

生来的犯罪人説を提唱した人類学者である。その驚くべき発想の卓抜さで世界に衝撃を与えた。

モンテッソーリはロンブローネの理論をどのように捉えたのであろうか。彼女はロンブローネやフランスのモレルの理論によって、知的障害児や犯罪者に対する市民の態度が嫌悪や拒絶や無視から少なくとも関心やわれみに変わったとして、その功績に一定の評価を与えた。一方で、モンテッソーリはロンブローネを「生理学的決定論」と呼び、その「原理を文字どおりに解釈すればするほど、人格を変化させうる影響をもつ教育効果への信頼が減じてしまう」として影響力の大きさを警戒した。このように評価と警戒を同時に示したモンテッソーリであったが、彼女の特徴は、遺伝的生理学的特質などの内的要因を重視するロンブローネの理論の中にも、社会状況や文化や風土などの外的要因を探求しようとすることを見出した点にあつた。

モンテッソーリは生理学的人類学のデ・ジョヴァンニについても興味深い見方をとった。彼は医学的人体測定研究のデータをもとに手足の長さや、胸幅の広さなどによって人間を厳密に分類しようとした医者であつたが、モンテッソーリは彼の理論においても病気の内的要因だけではなく環境などの外的要因に対する視野も存在することを見出したのである。

このようにモンテッソーリは、遺伝などの内的要因を重視した当時の人類学研究に影響を受けながら、その研究にも外的要因への視座があつたことを見出した。そして、自分自身は内的要因よりも外的要因である教育の可能性を模索していくた。

モンテッソーリは、「人類学の教育分野の研究」、すなわち、子どもの学業に関する研究は「他のあらゆる分野と同様、必ず生物学分野と同時に社会学に立ち入る」必要があると考えていた。そして、子どもの学業成績と家庭環境との関係などについて調べ、貧しい子どもは育つ環境が劣悪なために学業がふるわないことを指摘した。つまり、内的要因よりも外的要因の影響の大きさを主張し、教育の重要性を示したのである。

彼女は、「学校や教育学で要請されている改革は、社会生活に不適応を示すものを含む、発達過程にあるあらゆる子どもの保護を導くものである」（『教育学的人類学』）と述べ、子どもの階層格差の激しい時代にあって、社会環境に恵まれない多くの子どもを含むあらゆる子どもの保護と教育という視点に立った教育をめざしていった。

モンテッソーリはローマ大学の恩師セルジからも大きな影響を受けた。彼女は哲学が科学を統合すると捉えていた点でセルジと一線を画す面を有していたが、セルジからは特に教育学を科学的な教育学にするという点で影響を受けた。そして、よく見てよく知るという人類学の方法を新しい教育学の基本として取り入れ、子どもの個別研究という視点を得た。

「教育学の分野において、自然科学の方法は個別の対象の研究へとわれわれを導く」。「もつとも重要なことは、改革された教育学の最初のページは人類学的基礎の上に成り立っているということ。これはまさに、科学的という名の下に行われる教育学の新しい発展である。それには教育される者を知ることが基本である」と述べている。

従来の教育では子どもは集団として捉えられ、子どもひとりの個別的事情に対する関心は低かったが、彼女は子どもの個別的研究にもとづいて教育学を発展させることで新しい方向をめざしたのである。それは、「子どもの家」が創立された当初は、個人調査票を用いた子どもの身体に関する測定調査となつて現れたが、その後、彼女の関心は子どもの形態よりも行動の観察が中心になつていった。

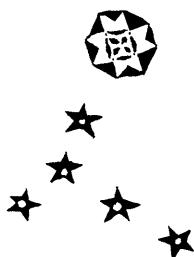
モンテッソーリによる子ども観察の第一の特徴は、それまで適切であると考えられていた条件とは根本的

に異なる条件を設定して、自由に自発的に活動する子どもを観察するというものであった。その条件とは「子どもの本性が個別的に現れてくるような発達を可能にする自由」と「活動のための動機」が豊富な環境を提供することであった。

観察の第二の特徴は、子どもとの受容的な関係を基盤とした中での観察という点である。

モンテッソーリはこれについて次のように述べている。

「人間を教育しようとすると、人間にとつて人間性に対する関心は、観察者と被観察者とを結ぶ、より親密な関係によつて特徴付けられなければならない。そうした関係は、動物学や植物学の研究者と、研究対象である自然との間



には存在しない」(『科学的教育学の方法』)。

このようにモンテッソーリは教育における観察は、他の自然科学とは異なり、観察者と被観察者との間の親密な関係、すなわち、教師と子どもの親密な関係が基本であるとした。そして、親密な関係の中でこそ子どもが眞の姿を発現させていく可能性を示唆し、教師には「科学的精神」とともに「人間から人間にに対する愛情」を求めた。教師と子どもの親密性、そして、子どもへの「愛」の中でこそ、子どもが本当との姿を現すという捉え方がそこにはある。親密性や「愛」は、今日では「受容」という言葉で言い換えられるものであると考えられる。モンテッソーリは医学や人類学に影響を受け、実証的な観察を志向したが、それは單なる実証主義に還元できない、人間的関係を基盤とした中での観察という特殊性をもつていたのである。

モンテッソーリはこのような条件と関係の下で落ち着き、秩序感があり、知的好奇心に満ちた子どもたち

を発見し、後に子どもの変化を「正常化 (normalizzazione)」といふ名称で呼ぶようになる。しかし、彼女は、もちろん好ましくないとされる子どもの行動にも出会う。ものをこわす、いらっしゃる、内気、不注意、依存などの行動である。その際、彼女はそれを「徹底した教育的処置によつて正すのではなく」、子どもを愛すること、子どもの自然な欲求を理解し、受容することを基本とした。「子どもは大人によつて妨害されない安らぎ、自由、安全の場を与えられた時はじめて自己を明かす。子どもは愛に満ちた人の前で、眞の本性を打ち明かす。そして、愛する人だけが真にものを見ることができ、子どものデリケートな心の動きを見ぬき、理解できるのである」と、後に述べている。

人間の中には様々な性質が備わつており、それは対人関係のあり方によつて多様な形となつて現れてくる。つまり、管理的抑圧的な大人の態度と、子どもの

欲求を理解し、子どものために準備した環境で子ども

を援助し、欲求を充足させるという態度とでは、それ
に接した子どもが現す性質が自ずから異なる。

子どもに自由と文化的な刺激を提供しただけではなく、モ
ンテッソーリが示したこのような親密性と理解と受容
によつて、子どもは自然に好ましい特性を示し、子
どもが好ましい特性を示すようになれば
なるほど、その欲求は好ましいものと
捉えられることになつたと考へられ
る。

生命に対する関心と生命の援助

さて、『教育学的人類学』には、モ

ンテッソーリ教育思想の土台となるも
う一つの特徴的な視点の萌芽が見られ
る。それは、人間の「生命」(vita)
に対する関心と生命援助の思想であ

る。

「われわれは世紀を超えて人類を存続するものとして
の子孫に対する責任に関して無知であり、分かつてい
ない。彼らは、われわれ生物学的存在の究極的な目的
である。一人ひとりは過去と未来の命を結ぶ鎖の一
つに過ぎないのである。われわれは、周囲の環境や環
境に対する関心と生命援助の思想であ

organism; while the internal cells absorb nutrient not only for themselves but for the others. This is the simplest example of a process that becomes more and more complex in the formation of higher organisms; in adapting themselves to their work, the cells become greatly modified (formation of tissues) and perform services that are useful to the entire organism. And at the same time, because of the very fact that they have been differentiated, they become dependent upon the labour of others, for obtaining the means of subsistence. Similar laws seem to persist even at the present day in the formation of social organisms, in human society.

During the development of the embryo, all animals pass through similar phases; and to this man is no exception. He traces its origin to an ovum-cell formed of protoplasm, nucleus and membrane, measuring only a tenth of a millimetre, yet vastly large in comparison with the spermatic cell destined to fertilise it by passing through one of the innumerable pores that render the dense membrane penetrable.

After the ovum-cell is fertilised, it constitutes the first cell of the new being; that is, it contains potentially a man. But as seen through the microscope, it is really not materially any-



FIG. 1.—Human Ovum. Magnified 200 times.
a. Nucleus; b. Vitellus; c. Germinal Vesicle.



FIG. 2.—First Division of a Fertilised Ovum.



FIG. 3.—A Morula as seen from the Outside.



FIG. 4.—An Egg and Spermatozoon of the same Species, about to Fertilise. Note the difference in proportional size of the two cells.

thing more than a microscopic cell, undifferentiated, and in all things similar to other independent cells or to fertilised ovarian cells belonging to other animals. That which it contains, namely, man, often already predetermined not only in species, but in

M・モンテッソーリ『教育学的人類学』より

—細胞分裂する生命—

境の中に現れる思想の進歩に夢中になつてゐるので、これまでには、自分自身、すなわち生命に关心を向けてこなかつた』。

医学と生物学、人類学に影響を受けたモンテッソーリは、このように生物としての人間、人間という種としての生命、過去から未来へ永続する生命としての人間の存在を認識し、生物としての生命自体の素晴らしさを高く評価した。

そして、「生命の発展」のために、「人間間の協力や社会的組織」や「生命の防御に関する不安」からの解放が必要であると訴えた。さらに、教育の普及と、労働条件と社会条件の改良、そして平和の中において发展が可能となると指摘した。

また、「教育学的人類学」でこのように考察された生命は、「科学的教育学の方法」では、「生命の援助」という思想となつて次のように示されている。

「生物学的観点からすれば、幼児教育における自由と

いう考え方は、その人格の最もふさわしい発達に適する条件として理解されなければならない。それは精神的側面からと同様に生理学的側面の発達であり、これは意識の自由な発達を含む。教育者は、生命を深く崇拜することによって、子どもの生命の発達を人間的関心で觀察し、尊重しなければならない。さて、子どもの生命は抽象的の觀念ではない。それは個々の子どもの生命である。そこには唯一の眞の生物的表出、すなわち、生きている個人がある。一人ひとり觀察される個々の子どもに教育は向けられねばならない。すなわち、子どもの生命の正常な展開に対する生きた援助である。子どもは、成長する身体と発達する精神である。この生理的心理的な存在は、永遠の根源を持つ。すなわち、生命である。われわれはその神秘的な可能性を傷つけたり、押しつぶしたりするのではなく、その継続的な表出を待たなければならない』。「人間、特に、文明人の場合、人間の生命を深く知ることの必要

は言うまでもなく、その保護と助成が必要なのである」。

「こゝでは、生命の尊重、子どもを一人ひとり個別的に研究することの重要性、子どもの人格の適切な発達のための自由の重視、そして生命に対する適切な援助が不可欠であると主張されている。生命力が外側からの力によつて妨げられる」とのないよう、生命力の援助としての教育概念が示されている。

さらに、モンテッソーリは「人類のあらゆる勝利あらゆる進歩は内的な力に立脚する」、「世界を進歩させるのは生命の内的で壮大な力」であるとして、人間の内的な生命の力の中に、世界を変える原動力を見出し、それをもとに人間や文化の進歩を図つていこうとする基本姿勢を確立した。

ところで、この人間の「生命」は『科学的教育学の方法』において、「知的生命」(vita intellettuale) という新たな価値が付加された概念としても登場してい

る。「知的生命」とは子どもの内面にある知的な性質を示す概念であり、活力ある「生命」に知性の概念を結び付けるというモンテッソーリ独自の展開がある。これによつて彼女の教育思想がめざす方向性が明確になり、これを土台としてモンテッソーリの知的教育が進むことになった。

モンテッソーリは、人類学から影響を受けながら人類学のものの見方を刷新するような研究をさらに行つてゐる。すなわち、従来の人類学とは異なる女性像を提起している。その見方の転換には当時の女性解放思想からの影響もあつた。次回はこの点について考えてみたい。

(甲子園短期大学)

註 M. Montessori, *Pedagogical Anthropology*, New York, Frederick A. Stokes, 1913, p.44.

読むということ

—自分のために—

永野 むつみ

このところ、「読みきかせ」の指導を頼まれることが増えている。始まりは、ある公立文化施設から頼まれ、いやいや請けた仕事「絵本塾」。「市民に、とりわけ子育て中の母親に、読みきかせの指導をして欲しい」というのが当初の依頼だった。人形劇俳優の私はこのところ、朗読を指導する力量があるとも思えないし、なによりも私は、「読みきかせ」と言う言葉が好きではない。そこで、「ただ絵本を読む」「しかも自分のために」「一番楽な声で」「子どもの参加は原則的に無し」ということならお請けできる、として出発したの

だつた。

講座は終了し、今では自主的なサクールとして続いている。参加者は三十代から六十代の女性たち。月に一回、二時間。事前にテーマを決めたり決めなかつたりして、それぞれ二冊ほどの本を持ちよる。その中からさらに二、三冊を選び、一ページずつ声を出してまわし読みをする。絵本の話をしているだけなのに塾の仲間たちは、ずうつと昔からの知り合いのような気がしてくる。いわゆる履歴書に書くべきことはほとんど知らなくとも「あ、この人に触れた」「この人知つてると感じる。私はこういう出会い方が好きだ。何を美しいと思い何を憎むか。それぞれが感動を語り、感動とともにすることは多分、人格の根っここのところに触れ合うことなのだろう。今では私の大切な時間となつてゐる。あ

まりにも楽しいので人形劇の公演や、講演に行つたおりに、この話をあちらこちらでしてしまふ。それで、興味をもたれた方のところにまた招かれる、ということになるらしい。

つい先日も仙台の近隣の市へでかけた。二十代から五十代の男女が二冊ずつ好きな絵本を手に、嬉々として集まられていた。絵本好き、あるいは「読みきかせ好き」はどこにも大勢いるらしい。どの本も魅力的だったが、誰もまだ読んだことがないということでこの日は、私が持参した『かちんこちんのムニ



ア』（アスン・バルソラ作・絵／宇野和美訳／徳間書店）を読むことになった。まず、私が、私の絵本塾で大切にしていることを話した。とりわけ、声を出して読むにあたつて心がけてほしいことについて、つまり、「書いてあることをまず自分がちゃんと読み取ること」「無理に表現しないこと」を伝えてからまわし読みをした。ちなみに本文の出だしはこうだ。

「アンドレア、ムニア、おきなさい！　もう8時よ」

ねえさんのアンドレアは、ぱつとはねおきましたが、ムニアは、きこえないふりをして、ふとんをかおまでひっぱりあげました。しばらくして、またおかあさんがやってきました。「ムニア、さあ、おきるじかんよ……」

三人目が読み終わったとき、私が質問した。

「あなたはふとんを顔まで引っぱりあげたことがありますか？　そのときの、足先や腰や顔に布団が触れた感じを思い出してみて」「えーと。そんなこと考えたこともないよ」とその読み手は頭を抱える。

「今あなたに必要なイメージは、絵画や写真のようなどビュジアルなものではなくて五感というか体感の記憶なの。思い出してみて」「うーん」と唸つたあともう一度読み直す。するとたいてい、緊張した硬い読み方だったのが急に柔らかく、そうしてゆっくりとした調子になる。声も内側にいつたん呑み込む感じで、それから出てきているように聴こえしばらくして、またおかあさんがやってきました。「ムニア、さあ、おきるじかんよ……」この変化に気がつくのはまず聴いている

人。その後に本人。最も決定的な変化は、聴き手の私たちにも、書いてある中身がわかるようになること。それまでは、言葉は確かに届いてはいるのだが、何を言っているのか良くなつかまえられないことがある。スピードが速いとか遅いとかではない。取り残されたような感じがする。情景が浮かび上がつてこないのだ。ところが読み手が書かれている内容を読み取ろうと集中すると確かにテンポが変わり、私たちもついていけるようになる。さらにおかあさんはどこから声をかけたの？ベッドの近くで？ 遠くで？ 子どもたちを見下ろしながら？ あるいは顔を寄せて？」すると、初めのおかあさんのせりふと、二言目とに変化が生まれる。おかあさんの視線の高さと方向を意識してもらつただけなのに、

声の強さや方向の変化となり、声に色が生まれる。結果としてそのシーンがありありと見えてくる。聴き手にも読み手にも。そしてそれは違う人にやつてもらうとまた違った読み方になる。そこには確かに読み手のとらえ方、イメージの違いが反映する。もし私ならどうするだろうかと、その登場人物にわが身を置いて考える。人は自分の体験から推しきることでしか他者や、事柄を理解することはできないのだろうか。同じだと安心したり、違う場合はへえと驚いたりする。



どちらが正しいとか間違っているとかいうものではない。理解はできるが共感できない、とか頭ではわかるが腑におらない、とうこともあります。本の中に書かれている人物や事柄に心を寄せたり、跳ね飛ばされたりする。

「ああ、こういうことだったのだ」と、かねてから自分の中にもやもやと存在していたものに言葉が与えられ、その正体に気がついたりもする。自分の心の内側を語るときに「あの本にもあつたけれど」とか「あの絵のよう」に」と、自分の言葉の足りなさを補う。

同じ本を読んだ人とだとなおいつそう理解し合える。つまり共通の言語をもつということになる。言葉への信頼をとりもどすことができる。しかしやはり読むということは極めて個人的で個性的なことなのだなあと思わざ

るをえない。声を出して読むとそれがいつそう表面化する。読みきかせとはそういうことをしているのだ。聴き手の側からいうと本そのものへの興味と、読み手への興味が同時に満たされていく。そこが面白い。

こうしたやり取りを繰り返しているうちに、参加者は始まる前のいくつかの質問に、自分で答えを出しているようだ。

「おばあさんの声はおばあさんらしく、子どもの声は子どもらしく、魔女の声はやはり怖



い声で言つた方が良いのでしようか」

「感情をこめて読んでも良いのでしようか」

「どの子にもわかるようにゆっくり読んだ方が良いのでしょうか」などなど。

色々な考え方があると思うが私は、読み手

はただの通りのいいパイプであればよいのではないかと思つてゐる。読み手が、書いてあることだけ読もうと思つても、どんなに抑えても滲み出してくるその人らしさ。それが個性であり表現というものではないのか。まず自分が受けとめ、味わうということがあり、

その結果として表現が生まれるのではないかと。読み手がどんなに下手でもそれなりに喜んでもらえるのは、確かに何かが伝わつてゐること。それはやはり本そのものに力があるということと、聞き手の子どもたちに聴き取る力があると言うことなのだろう。だ

から私たちは安心して好きなように読めばいい。まずは自分のために。

絵本とは良いものだ。子どもだけのものにしておくのは惜しい。絵も文章も魅力的だし、きちんと人間が描かれ、哲学がある。なによりも文字が大きいし、短いのも有りがたい。年を重ねてますますそう思う。

(人形劇団 ひっぱたあむ)

カット 山根裕子

目をこらして (23)



琴の音が静かに流れる。

畠が敷き詰められ、いつもとは違う空気が満ちている。
三月三日、遊戯室はお茶会の会場となる。

静かに遊戯室に入ってきた子どもたちは、正座をして待つ。子どもたちの前で、着物を着たお茶の先生が、凛とした風情でお茶を点てている。子どもたちは、神妙な顔でそれを見ている。

お茶菓子を盛った器が、まず子どもたちの前に置かれた。子どもたちは、薄桃色のきれいなお菓子に目を奪われながらも、それをそっと自分の懐紙の上に取り隣の人へ渡していくという動作に心を奪われている。

菓子を口に運ぶ。おいしいね、と言う顔で隣の友達と静かに頷きあっている。

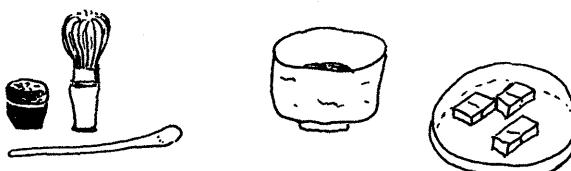
お茶が、子どもたちの前に運ばれる。

礼をして、お茶をいただく。

お茶碗を両手で包むようにして飲み干している友達を、どう？ おいしい？ とても言いたげに見守っている。

全てが、静かな中で進んでいる。

その日 遊戯室には
ちがう風が、ゆったりと 流れる……





耳をすまひて

子どもたちも、私も、久しぶりの静寂の中にいた。

口に含んだお茶は、ごく少量なのに、たっぷりいただける
たような、心の満足感がある。

お茶をいただく時も、その前のお茶菓子をいただく時
も、隣の人には「お先にいただきます」と軽く会釈をした。
そして、おいしくいただいた後に茶碗をさげてもらう時に
も、「ごちそうさまでした」とお礼を言つた。

お茶を飲む、という行動のまわりに、ずいぶん多くの人
とのかかわりがあった。それが、心の満足感につながつて
いるのかもしれない。

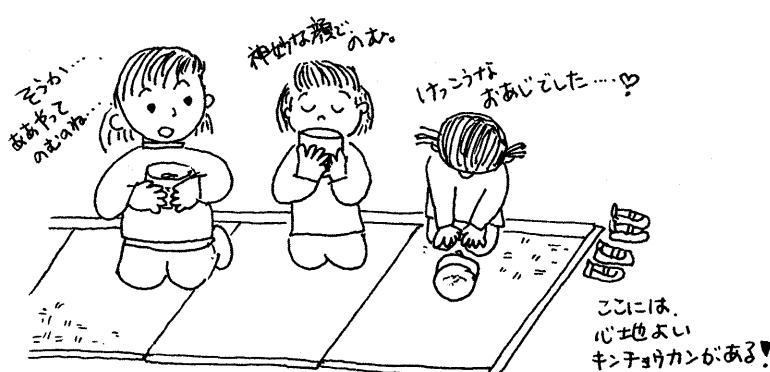
「お先にいただきます」「結構なお味でした」

そんな一つ一つの言葉や行動を、改めて子どもに伝え、
手本となるようにとやつてみながら、思つた。

立ち居振る舞いの中に心がある。心は、立ち居振る舞い
の中にあらわれる、ということを。

静かな気持ちで、やさしい気持ちで、今日も子どもと一緒に歩んでいこう。

絵と文 官里暁美（目黒区立ふどう幼稚園）





変わるものと変わらないもの

—進行中の歴史の中で—

津守 真

『幼児の教育』第一〇〇巻第十二号、「私が幼児教育を志した頃」(24)（最終回）の原稿を編集部に送った直後、ニューヨークの高層ビルがテロによって崩壊して多くの人々がその犠牲となつたニュースをテレビで見た。そのとき私共が聞いたアメリカ大統領の最初の言葉は「報復」だった。私は思わず身震いした。そして書き終わつたばかりの五十年前のアメリカの体験が蘇つた。ミネアポリスでの最初の晩にクラウンス夫人から、真珠湾のことは忘れないと言われた。しかし、そのことは二度と私共の会話には上らなかつた。心を通わせ合つた日常の家庭生活が次の日からはじまつた。ク



ラウンス夫人（おばさん）の死のときまで私共の友情は変わらなかつた。私はアメリカのことを書いて来た直後でもあり、現在進行中の歴史の中でこの続きを書き加えな
い訳にはいかない。

今回、テレビで「報復」という言葉を聞いたとき、私はあの戦争の裏側を見た思いだつた。歴史が一挙に第二次世界大戦開戦のあの時点にさかのぼつたような気がした。しかし、歴史は繰り返しても、決して元のところに戻りはしない。歴史の螺旋曲線は少しずつずれて違う点から続く。その転回点で人がどのように考えて新たなる出発点に立つかが問われる。二十世紀の日本に生をうけた者がこの半世紀に学んだことを無駄にしてはならない。いま私が直面しているのが二十一世紀初めの世界の現実だからこそ、報復ではなく、愛と慈悲を根本に据え直して生きるのが未来をつくるのではないか。殊に保育と教育にたずさわる者はこれまで以上に愛と慈しみの人間関係を大切にして毎日を過ごさなければと私は思った。

ガンジーの戦闘的非暴力

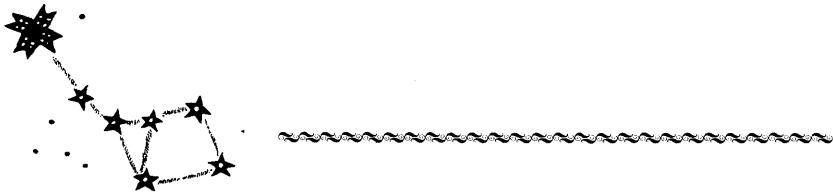
テロの後数日間、アメリカはこの五十年間に全く変わつてしまつたのかと重苦しい思いで私は過ごしていた。そのとき、ひとりの友人からガンジー研究所（アメリカ、テネシー州メンフィスにある）のメールが送られて來た。それは次のようなものだつ



た。

「九月十一日以来、多くの人から手紙や電話の問い合わせがありました。このように信じ難いほどの非人間的な暴力行為に対し、非暴力によつて応答するのにはどうしたらよいのかとの質問でした。非暴力は、危機の瞬間に用いることのできない手段です。非暴力は個人の態度であり——ひとつの国の集合的態度は個人の態度を基にしています——愛と慈悲と尊敬と理解と感謝の心に基づいてポジティブな人間関係を作り上げる態度です。……われわれに必要なのは、このような怪物を作るに至つた事態を冷静に分析すること、どうしたらこのような怪物を排除できるかではなく、どうしたらこのような事態を避けることができるかということです。正義とは人を作り変えることであつて、復讐ではありません。……テロリズムに対し非暴力をもつて答えるのにはどうしたらよいのでしようか。軍事力は決してバラ色の結果を齎しません。何千人の罪のない人々が巻き添えで殺されます。」

「今回のテロで愛する人々を失つた方々には深い悲しみと哀悼を表します。しかしこのエピソードを復讐心に変えてはなりません。怒りと憎しみはあなたに内的平和を齎しません。平和で尊敬すべき理解ある世界をつくるために、へゆるすことを学び、そのために献身することを学ばなければなりません。それによつて、今回の、またその他の暴力によつて死んだ犠牲者はより良く記憶されるでしょう。」とメールは結ば



れていた。たとえ少數者であつても、直ちにこのようにメールを送つてくれる人があることを私は嬉しく思つた。

エリクソンとガンジー

エリック・H・エリクソンは、言うまでもなく『幼児期と社会』（みすず書房）の著者であり、後年、人間のライフサイクルと歴史についての一連の著作でガンジーを詳細に研究している。一九六八年に南アフリカのケープタウン大学でなされた「洞察と自由」という講演はガンジーを主題としているが、現代までをも見通した情熱を内にこめたものである。その講演の日は「ヒロシマ」の原爆の日に当たることをエリクソンははじめに述べている（『Life History and Historical Moment Norton 1975』）。ガンジーの非暴力の主張は、消極的な受け身の非暴力ではなく、戦闘的非暴力（ミリタント・ノンバイオレンス）である。エリクソンはガンジーの言を引いて、「憎しみと暴力に立ち向かうことができるのは、朽ちることのない愛である。その単純な論理をもつて積極的に近づくならば、最も悪い敵にも癒しを作り出しができる」「あなたとあなたの敵とが対話の中で一緒になるとき、どちらの側をも害する事なく、両方が変容する。その行為が真理である」という考え方を詳しく述べる。ガンジーは当時の支配者英國に対して不服従運動を開拓するときにも、酷暑の時には英軍に道をあ



け、ユーモアをもつて相手に向かったと言う。エリクソンはこれらのことと語りつつ、現代のアメリカに言及する。「最も富んだ国、巨大な技術をもつて武力をほしいままにしている国、ときに精神病的に最も小さな人間が最小の武器によつて最大のものを払拭しよう」という衝動に駆られる国、また同時にそれらのことにもかかわらず、知的な若者達は、熱情をもつて國の内外で現代の倫理の基盤を問い合わせ直そつとし、非暴力の思想をときには暴力的に推進しようとしている」。歴史は繰り返す。けれども、たとえ少数者でもその中で平和と非暴力の思想を抱き続ける人がいるのも事実である。

今年は国連が定めた「非暴力と平和の国際年10年」の第一年目である。その年に今回のが起きたのは皮肉であるが、それを国際的合意にまで作り上げたのもまた現代世界であるのは心強いことである。子どもに平和を教えるだけでなく、平和に生きられる環境を作るのが大人のつとめである。子どもの仕事をする者は、身近な小さなところで日々それを実現してゆくことができる。それが未来を作る最大の力であると思う。

育てられていく時代に育てる」とを学ぶ(5)

—高校生を学びの主体とした

「絵本読みあい実習」をとおした自分づくりへのとりくみ—

金田 利子

百瀬 愛

はじめに

今回は、高校生を主体とした実践の二回目に当たります。先回は、親になるかならないかにはかかわらず、大人としてすべての男女にとつて欠かせない「親

性＝養護性」の育成についての実践をとりあげました。今回はその基礎となる「自分づくり」、とりわけその前提となる自己信頼感の形成に視点をおいてとりくんだ、「絵本の読みあい実習」の実践を百瀬愛さんに報告して頂きました。

なぜ、「高校生」と「絵本」なのか、

「絵本の読みあい実習」に至るまで

私は現在浜松市立高等学校で家庭科教師をしていま

す。静岡大学の保育研究室で学び、教師生活は八年目を迎えます。今の高校に赴任してからすでに、四年の歳月が過ぎようとしており、入学当初から担任をしてきた学年の生徒たちをいよいよ三月に卒業させます。

私にとって初めての卒業生ということもあります。今年度は進路指導で大忙しの毎日です。当校は、今年は、盛大に「創立百周年記念」を行うという伝統ある女子校で、自主自律の精神を持った生徒たちの多い学校です。

1. 自分の生涯にかかわる「絵本」との出会い

私は、大学での卒業論文として「高校家庭一般において『国連子どもの権利条約』を取り扱う意義と可能性——高等学校における実験的授業実践を通して——」を

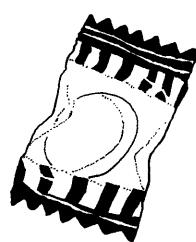
テーマに研究しました。

その中で中心軸となるものとして「青年期における自己信頼」というものに焦点をあて、常に自分

自身に対してもそれを当てはめていました。

その時、出会ったのがシルヴァスタン作『ぼくを探しに』（倉橋田美子訳、講談社、一九七九年）という絵本でした。文字がほとんどなくシンプルな作品ではあるけれども、私に衝撃が走るほどの感動を与え、あまりの奥深さから、生涯自分の身に離さず持つたい本になつたわけです。

そして、教師になつてからも家庭一般の授業において、「保育」がスタートする第一日目の授業時に私が読み聞かせるという実践を毎年続けてきました。その授業では、毎年本の名前をあえて言わず、読み終わった後に生徒たち自身にタイトルを考えさせるよう



にしてきました。それは、生徒たち一人一人の感性、人生観を教師自身が知るよい機会となっていました。

2. 「絵本」の世界がさまざまな所で見直され

注目されるようになつて

私が絵本に興味を抱くようになつてから、新聞や雑誌などで、絵本についての特集、研究記事に目がいくようになり、授業中にも生徒たちと一緒に考える機会を設けました。

その中で、いくつか私自身が強く影響を受けた記事の概略を以下にまとめてみたいと思います。
一九九七年から二〇〇一年の間の記事で、特徴的な点をあげますと、以下の四点が見出されます。

* まず、次にあげました例のように、生きる手がかりとしての絵本の可能性に養眼した記事に出会いました。

* さらには、子どもの育ちにとつて絵本はなぜ必要

「……（前略）……絵本は、作るときも、読むときも自分で立ち止まることができる、『間』をもてる唯一のメディアではないか」それゆえ、「子どもたちの明日を生きる手がかり」になり、「お年寄りにとつては、いまここで生きている自分を感じ取る手立てになる」。

* そして、子どもや高齢者のみならず、働き盛りの大人に人気のある絵本に関する記事が目に留まるようになりました。気持ちをうまく言えない、コブタを主人公にした絵本（小泉吉宏作『コブタの気持ちもわかつてよ』ベネッセコーポレーション、一九九七年）に反響が大きく、子どもの時に感情を押し込めた経験がコブタへの共感を呼んでいる、「疲れた時代」に癒されたいと願う大人たちの気分が背景にあるのではないかというものがそれに当たります。

なのかという意味を問う記事に出会えたことがあげられます。たとえば、「本はなくとも子は育つが、育ち方が大分違うのではないか。……（中略）……思いをめぐらしあれこれ考える人間は、短絡しないし、一直線に事を運ばない。必然的に他者を思いやる」等の意見が共感を呼びました。

* もう一つが「『読み聞かせ』から『読みあい』へ」という変化について取り上げられていました。よく「読み聞かせ」というけれど、その願いは、絵本で楽しい時間を共有したいというものではないか。子どもと信頼したい、心が通う。それが喜びにつながる。だから、「読みあい」という方が、意図をはつきりさせるのではないかというものです。

3. 前任校でのSくんとの交流から

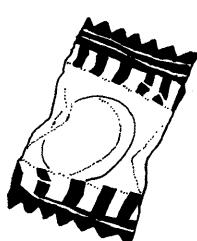
私が新卒で最初に赴任した高校は男子生徒が圧倒的

に多い専門高校でした。

その高校では私が初の家庭科専任教師ということもあり何もない所からの教師生活のスタートでした。

ここでもやはり、家庭一般「保育」の授業の初日には、毎年『ぼくを探しに』の絵本を題名を自分で考えさせながら生徒の前で読みました。男子生徒の多い中の生徒の反応としては「先生は急になにをしようとしているんだろう」といった表情はしているものの、不真面目な態度ではなく心を傾けて聞き入ってくれました。

その中で、どのクラスの誰よりも反応がよく、真っすぐに「先生！ 感動したよ。僕にはすごくよくわかるよ！」と大きな声で私に言つてくれたのがS君一人だったのです。



S君は、外見は今どきの洒落た高校生という感じの

りでした。

生徒でしたが、理解力に優れ物事を探究していくというタイプの生徒でした。しかし、時に不安定な面を見

せることがあり、以前に「死んでしまいたい」という走り書きのメモを突然渡されました。

本当に真剣に悩んでいたのか、私にただ甘えていたのかは今でもわかりませんが絵本の実習を行った時の彼の反応は、正しく私の心が伝わり通い合ったような嬉しさがあり、今でも鮮明に覚えています。そこで私は確かに何か手ごたえのようなものを感じていた気がするのです。

絵本を取り入れていく授業のスタイルはこの時期を境にしてより明確なものになりました。そしてさまざ

まな国のさまざまなジャンルの絵本に出会い研究する

ために、少しずつ行動に移していきました。この時期が、もちろん自分の足で自分の目を使って自分の感性を頼りにして内容のよい絵本に出会うための旅の始ま

「読みあい実習」実践の展開

この実践は、現任校の三学年の「選択保育」の授業で行いました。主に保育関係への進路希望者が選択しており、そうでない場合にも特に強く興味関心を持つて選択してきている生徒が集まってきたため、大変とりくむ姿勢が積極的なクラスです。授業の内容も、さまざまに工夫し、実践的なものをできるだけとり入れるよう留意してきています。今年度の生徒数は、十六名と十七名の二つの集団からなり、週二回計三時間ずつです。

1. 方法

時間の設け方は「選択保育」の授業において、一年を通して毎时限から十分間をこの時間にあて順番に一人ないし二人がクラスのみんなに読み聞かせるという

方法をとりました。読みあいに使う絵本は、これまで

自分が育つ過程で読んでもらった絵本のなかで、最も好きで何度も繰り返し読んでもらった、自分にとつて大変大切な意味を持つ本を中心に、生徒自身が選ぶようになりました。週二回計三時間の授業が一年間つづくので、この観点だけでは絵本が選びきれない場合には、家に眠っている昔懐かしい絵本、近くの図書館で借りる、きょうだいや知り合いから借りる等々情報の収集の方法についても示唆しました。

四月の授業のはじめにこのことを説明し、まず、本

人にやつてみたいという意志があるかどうかの確認のためのアンケートを実施します。これは、教師側から強制的にというのではなく、提案を教師がした場合にも、生徒たちに自分たちで授業を作っていくという意識を持つてほしかったからです。

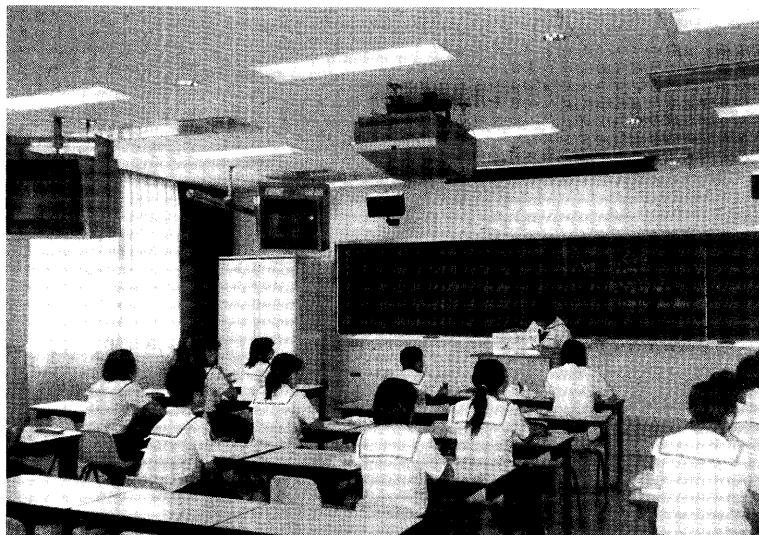
はじめはやつてみてもいいという生徒から順番に発表者を決めます。途中からやってみたくなった生徒が

いたらもちろん次々に参加してもらいます。

毎回一人ないし二人ずつみんなの前で自分の選んだ本を読み聞かせます（写真1参照）が、最後に必ずなぜその本を選んだのか、自分の育ちとのかかわりについて、まず、読み手の生徒にエピソードなどを含めて紹介してもらいます。つづいて、数人の生徒に感想を発表してもらい最後に教師自身の実体験、思い出などを話しコメントを付け加えるようにします。

2. ねらい

なぜ、このようにしたかについては次のような考えからです。毎時間とおして十分間ずつ行つていくのは保育の心棒となる「自分づくり」を、保育の単元を学んでいる期間をとおして意識していくようにという配慮であると同時に、毎時間「保育」の授業へ、主体的に参加できるよう、導入の時間に、より人格に響く内容を取り入れたいと考えたからでもあります。



▲写真1 授業風景 聞き手はやがて読み手のまわりに集まってくる

また、自分自身の大切にしてきた絵本を紹介してもらうことを第一にしたいのは、育ってきた過程をぶりかえりつつ自分を見直し、自分史をみつめる契機として、「絵本の読みあい」が大変意味ある題材になるからです。直接には、なかなか語りえない、家族のことも含めた自分の育つてきた過程について、絵本をとおしてみんなに聞いてもらい共感しつつ友人を理解する場にもなるからです。

また、直接に自分の育つた過程で読んでもらつてきたわけではない絵本からも、他の人のコメントを聞きつつ直接体験した絵本とかわらせて、自分を振り返る契機になるのではないかと考えたからです。

3. 生徒の反応—自分づくりとのかかわりから—

この狙いは、命中しました。生徒たちはテレながらも絵本をとおして自分を語り始めました。

たとえば、『あきえ』という名のある生徒は、育つ

てきた過程をふりかえりつつ林明子作の『あさえとちいさいもうと』という本を読んだのですが、その後のコメントで次のようなことを語つてくれました。

「自分は家では姉の立場にあつたためか、この本を何度も何度も読んでもらつていた。母はそのたびごとに、いつも、『あさえ』を『あきえ』に替えて読んでくれていた。そういう母の気遣いを、今絵本とともに思ひ起こし、とても嬉しく思つている」と。これは、絵本を通して、親を対象化してみつめ、自分への思いを見直し、それを友人と共感しあうことができた事例です。

その他、人前で話すという体験が具体的に自信をつける力になつたり、保育者になつてからを意識する感想も含めて、これを契機にさらに自己信頼感に基づく自分づくりへの契機になつていくのではないかという感想が多く出てきています。

一、三の生の感想を上げておきましょう。

* 自分を見つめる契機

になつてゐる感想

「絵本は子どもに読み聞かせる、というイメージがあつたけど絵本実習をやつてこの年でもたくさ

ん学べることがあると思つた。子どもにとつて絵本は見たことのない世界を知ることで、想像力が豊かになると思ひますが、私たちが読んでもそれは同じで、現実的な考えに固定されつづつある気持ちをやわらげてくれていると思う。心温まる話も多いし、絵本を読むのは楽しい」。

* 友達と幼い頃を共有でき、友達の感想から学びあえる

「自分が小さい頃に読んでもらつたり、他の人たちが小さい頃に読んでもらつて好きな本を紹介しあえるの



でとてもいいと思う」。「毎回いろんな絵本に出会うことができて、すごく楽しい。」（中略）：絵本の後にみんなの感想を聞くと自分が感じたことやそれ以外の事を知ることができ、いろいろな感じ方があることがよくわかるので、面白いです」。

* 育ちの過程に「絵本」の存在を発見し、親への感謝「絵本読みあい実習」の実習のために、家に絵本があるか調べたら十二冊のものが五セットで計六十冊もあったのに、びっくりした。たくさんあるので本を選

ぶのは大変だつたけれど改めて、親に感謝する思いになつた」。

いたが先生に指名されて（だが）、やつてみると本当にいい勉強になつたし、楽しかった」。「みんなの前で読むのは、少し恥ずかしくて、思つたより上手く読めませんでした。でも、子どもたちのまえでは、将来保育者になったときには、感情を込めて読まなければならぬので恥ずかしがつてはいけないとthoughtでした。他のみんなが読んでくれるのは声がとても聞きやすいし、絵の見せ方も上手いので、その話で幼児に伝えたいことがよく伝わってきます」。

* 繼続による絵本観の深まり
「絵本実習を始めた頃は内容が面白い本、絵がかわいくて親しみやすそうな本がいいと思っていただけれど、最近の絵本実習をやつしていく中で、子どもに考えさせる絵本もいいと思つた。私自身、絵本を通していろいろ考えることができるようになつたので、そういう絵本をこれからも探していきたい」。

「最初は人の前に出て読むなんて恥ずかしいと思つて

* みんなの感動を共通の表現（形）へ

—「ぐりとぐら」の人形づくり—

「絵本の読みあい実習」は、自分づくりへの契機になりそうなさまざまな感想がでましたが、言葉以外での表現要求も出てきました。どの生徒もが大好きな『ぐりとぐら』においては、みんなで人形を作つてみようということになりました。

私は、それを進めてみることにしました。それは、共通するみんなの思いを言語だけではなくいろいろな方法で表現すること。これは、自分のいや自分たちの思いの表現につながる、ここから一人一人みんなが持つている「ぐりとぐら」人形を用いて絵本をさらに立体的に表現したり、自分たちの思いを表現しあつたり、幼児や学童など他の世代の人たちとかかわったり、自分づくりへの手立てになると思ったからです。

軍手という簡単な材料で全員一人一人のつくった「ぐりとぐら」人形の様子が写真2です。

4. 「読みあい実習」時間における

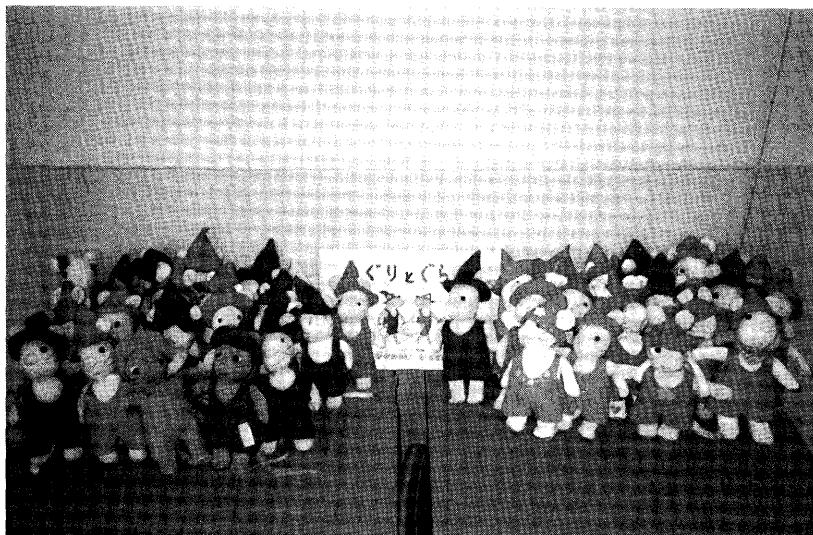
生徒のさまざまな変化

これまででは生徒の感想を中心に、主として認識面での成果を見てきましたが、今度は実習時間中の態度の変化を中心に生徒の変化をまとめてみたいと思います。

* 自主的に読み手になりたいという生徒が増えていった。自分たちで授業を開いていくという姿勢が芽生えてきた。

* 「絵本の読みあい」への期待の深化が見られた。たとえば、これは、当番になっていた生徒がうつかり絵本を忘れてきたときなど、今日はどんな絵本かと楽しみにしていた生徒たちが、非常にがっかりした姿を見せるようになってきた。

* 用紙の中の小さなコーナーに書く感想の字数行数が毎回増えていく。米粒よりも小さい字で自分が感じ



▲写真2 授業で作った「ぐりとぐら」人形たち

取った思いをその場で書き残している。

* 聞く姿勢にも変化が見られた。少しでも絵本の周りで聞こうと読み手の周りに集まつてくるようになつた。

* 絵本をとおして自己（生徒たちの小さい頃のことや家族とのかかわりを話し）を語り始めるようになつた。

* この実習への興味が深化した。今は授業の始まり十分間を当てているが、授業全部を使って「絵本実習」をやれないか、真顔で聞きに来た生徒がいた。

「絵本読みあい実習」をとおしての
教師自身の学びと自分でづくりへむけての

今後の課題

私は「絵本」というものを介して生徒たちと心の交流をしてきましたし、これからもつづけていきたいと思っています。何よりも生徒たちに表現する力が十分

にあるということを実感できただことが嬉しいことでした。

「国連・子どもの権利条約」では、第13条「表現・情報の自由」、第31条「文化的芸術的生活への参加」が保障されています。

私は高校生たちも、自分を自由に表現する権利、さまざまな異文化や質の高い作品に触れ合う権利を持つていると考えています。

生徒たちが絵本を使って展開していく授業は、まさに高校生の直の声、生きた言葉を聞くことができ、活気に満ちあふれたり、または、心に深く浸透していく感動を味わうことのできる宝庫です。これから大人になつていく生徒たち、なかには職業として保育に携わっていく生徒たちと共有したかけがえのない時間を、私の財産としていきたいと思っています。

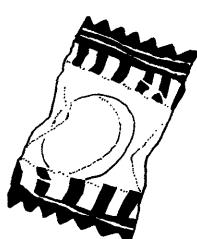
まだまだ、課題や問題点はありますが、絶えず向か心を持つて、生徒たちが学びの主体となる、自分づくりの実践を研究していきたいと思います。（以上百瀬）

おわりに

『子育てに絵本を』（山崎翠著、エーデル研究所）という本があります

す。これには絵本を媒介に育てるものと育つものが共感しあい心を通わせあうことについて述べられています。今まさに子育て中の人はもちろんですが、ここで見てきたように「育てられている時代に育てることを学んでいる」中・高生にとつても、絵本が大きな力になつてきます。

金田は、このシリーズの(1)において、「育てられている時代に育てることを学ぶ」ことは「親性＝養護性」の基礎を培うことであり、その内容は異世代と発展的にかかわる力の育成であり、さらにその根幹には、確固たる自己信頼感のある自分自身の育成（自分で）があると述べてきました。



この力の育成にとって、絵本はどんな意味を持つたでしょうか。

百瀬さんの実践は、絵本の「読みあわせ」というところに特徴があります。教師と、同じく「保育」を選択した友人同士が互いに読み手と聞き手になり、互いの選んだ本を通して共感しあっています。

絵本の内容を媒介にそこに生まれた共感がクラスをつなぐ見えない糸になり、互いの理解と人間観を深めていくのです。自分の将来就きたい保育者という職業の専門性にも目をやっています。

そこに生まれた共感がどうしても人形をつくつてみ

たいという思いになり、百瀬さんは、表現力をつけることそれを、子どもの権利条約と関連させて述べておられるように、自己信頼感に根ざした自分づくりに大切な能力として位置づけています。その点で、今回は「絵本の読みあわせ」から「表現力」の育成へといふところはよく展開されていますが、さらに言えば、

「表現力から自分でつくりへ」の方向についても、一人一人の内面形成とかかわらせて、さらに実践的な研究を深めていかれるといつそう「絵本・表現力・自分でつくり」の関係が明確になるように思います。

また、毎時間必ず、初めの十分間にこのとりくみを続けられたことは、簡単なようでなかなかできない、意味深い実践ではないかと思います。ここから、家庭科はもちろん人間の生きる原点として総合的な課題がどんどん生み出され、生徒も教師もそして間接的には父母も含めて人間的に育ちあえる自発的な学びの拠点づくりになつてているのではないかと思ひます。

金田（静岡大学）

百瀬（浜松市立高等学校）

ある日

撮影・平野 清





子育て支援の現場から

子どもの友だち関係に悩む母親たち

吉川はる奈

はじめに

「エンゼルプラン」に続く「新エンゼルプラン」が提起され、子育て支援の必要性があります

地域資源が連携し合いながら、子育てを支援活用も叫ばれ、家族とそれをとりまく多くのしていくという発想はもはやめずらしいことではなくなった。

ます問われるようになつた。地域資源として、保育園や幼稚園を中心とする保育の場の

ての自治体が取り組むべき課題となつていてことは間違いないだろう。しかし母親たちの子育てをめぐる悩みはつきない。

本稿では、筆者が保健センターの心理相談

や育児教室、保育園・幼稚園での巡回相談や育児支援事業、また子育てグループの立ち上げに参加する中で対応してきた、子育てをめぐる最近の母親・家族の悩みのあり様についてふれながら、支援のありかたについて考えてみたい。

保健センターでの育児教室から

母親のもつ育児不安を軽減しようと、地域の保健センターでは母子保健事業の中で、育児教室や子育て学習室が年間を通して開催されている。内容はさまざま離乳食や小児の病気に関するものから絵本とのふれあいや遊

び、心身発達についてなど、また平日の母親むけのものから土曜日に開催する父親むけのものまであり、担当者の試行錯誤は現在も続いている。



育児教室は自治体の広報紙に掲載されが、ほとんど発行当日の数時間のうちに定員が埋まるという状況である。三歳未満児をもつ母親対象の育児教室が多く、形式は子どもを抱っこして参加したり、部屋に設けられた保育コーナーで保健婦や保育ボランティアに子どもと遊んでもらいながら参加するという

ものである。

講演者による一方的な講演形式ではなく、受講者参加型が好評である。実は母親自身の不安を話したくて参加する場合が多い。育児教室の進行過程で出きる限り母自身が語る時間を探保することが大切になる。一方で、講演者に個人的に育児上の相談をしたい母親もいる。したがつて講演中の質疑の時間ではなく、終了後の自由質疑に列ができる。

育児教室の外枠を説明したが、中身についてふれたい。母親の悩みで目立つのは、「子どもが友だちとうまく遊べない」という悩みである。とはいへ、子どもの年齢が三歳未満

「公園でおもちゃをとった」「友だちをたたいた」「中に入らず友だちのまわりをうろろしている」から「いつも自分の物をとられてしまう」「ゆずつてしまふ」といった子どもたちが自分なりに人間関係を結ぼうとぶつかりあつてゐる姿がうかぶエピソードが語られる。「この時期はそれでいいんだよ。でも毎日だと他のお母さんにも気をつかうものね」というひと言で表情を明るくする母親も多い。「取る」側も「取られる」側も悩むのだから、どの母親も悩んでいるということでもあるのだろうか。

幼稚園の育児支援事業から

というと「うまく遊べない」のは自然な姿である。傍から見ると自然な姿でも、母親自身の負担感は強い。

具体的に悩みをきいていくと、母親からは

幼稚園も保育園とともに地域資源として、家族を支援する機関としての役割を期待されている。具体的に未就園者を対象に園庭を開

放したり、幼児グループを開催したり、育児相談をおこなったりしている。同時に、在園中の子どもの母親のもつ育児上の悩みや不安も受け止め、相談を行っている。

その中で、最近在園中の子どもの母親たちからこんな相談が目立つ。「いじめっ子やいじめられっ子にならないか、心配です」というものである。具体的に目の前の子どもの姿のこんなところが心配というのではなく、将来に対する心配である。昨今の子どもを巡る事件、社会問題が検討される中で、人間関係の希薄さや結べなさや狭さが指摘され、人間関係を結ぶ力、対人関係の力を育てることの重要性があちこちで強調されている。「いじめっ子やいじめられっ子」になると人間関係が結べなくなり対人関係の力も育てられなくなるだろうから心配だという。

実は、保健センターの育児教室できかれる母親たちの悩み「子どもが友だちとうまく遊べない」と同様、対人関係の育ちへの不安であること驚く。

母親たちは、子どもの対人関係、友だちとの関係にとても敏感である。「友だちとの関係を育てなければ」という意識が強い。従つて「仲良く」友だち関係を結ぶというところにこだわりがちである。そんな母親たち自身もまた、人間関係に過敏であることがとても多い。子どもの友だち関係の悩みとしての相



談が、母親自身の人間関係の悩みと大きく関わっている場合もある。

*

幼稚園でも保健センターでも、子どもの年齢は異なつても同じように対人関係の育ちに關する不安が強いということは、支援を行う立場としてどのようなことに留意したらよいのであろうか。三歳未満児対象の育児教室で不安が解消されていないからと考えるべきなのだろうか。

というよりも、育児に関する不安は恒常的に生じていると考えるべきではないだろうか。特に対人関係という悩みは、個の活動でのみおこるのではない、家族から集団へと場が広がるとより多く出会う、生涯を通しておこりうる悩みであるのだろうか。

地域資源の場として、保健センターや幼稚園、そのほか保育園や教育センターや育児支援センターなど、多くの機関が連携して支援していくことの必要性が指摘されている。

それは、このような母親たちの恒常的な悩みに関しては、場合によつては複数機関で継続的に支援したり、また相談員による母親を対象とする相談とともに保育者を通して子どもに働きかけ、間接的に母親を支援すること、コンサルテーションを取り入れながら柔軟にすすめていくことが必要とされるのではないかだろうか。

(お茶の水女子大学)

絵本三昧

(2) 絵本の伝え手の視点から

宮地 敏子

「読み聞かせ」から「読み合う」へ

一九八一年だからちょうど二十年前になる。五歳

の次男はニューヨークの幼稚園に入り、当初蕁麻疹と頻尿とチックにとりつかれた。医者は不適応による心因性のものだといったが、本人はいたって楽し
そうに毎日通っていたのである。日本では相當にや

んちやだつた彼の、自分を表現できないもどかしさが体にそういう形で出ていたのだと、症状が消える頃になつて理解できた。その頃になると、友達もわんさかでき新しい事物を英語で覚えると、日本語より先に英語が出るようなこともおこつてきた。ちょうどそんな時、若いお母さんから、絵本の読み聞かせの会をしたいと持ち掛けられた。異年齢の子ども

たちと日本語の集団で遊ぶこともできると思ふ」「おはなしになに?」の会を始めた。月に一回のことだつたが、絵本を持ち寄つて回覧したり、行事を企画したり、子どもたちだけでなく母親の情報交換、精神安定の場ともなり、四年後の帰国までとぎれることなく続いた。

「おはなしになに?」には、おむつをした赤ちゃんから、二年生ぐらいまで毎回五名から多いときでも十四、五名の参加者があつた。初めからまったくの自由参加で、毎回付き添う人、口コミで隣町から参加する人、ベビーシッターがわりに子どもを預けて用事を足す人と、母親の意識もまちまちだつた。

それでも、四季折々の行事には参加する母親たちも多く、発足の意図である日本語の環境を楽しく与えることは、ある程度できていたようだ。

だいたい私が「読み聞かせ」おばさんだったのだが、子どもがお気に入りの一冊をもつてくることも

半ば慣例になつていて、その子のお母さんが皆に読み聞かせた。ある時、日本から田舎のおばあちゃんが送つてくれたという幼児雑誌をもつてきた常連サンの男の子がいた。「シユワツチ」とか「バーン」とか「ガツン」とかのことばしかない戦闘場面が続き、最後には正義の味方が勝つ。ほんの数場面を、ことばになまりのあるお母さんがなんとも恥ずかしそうに、ゆっくりページを繰つて丁寧に読んだのだった。それを見聞きしている子どもの得意満面の顔!ほかの子どもたちもヒーローの登場に大喜びだった。

「こんなもの読んでいいんでしょうか」「わたし、読むのとてもへたなんです」事前にそのお母さんは私に言つた。迫力満点に「シユワツチ!」と私が読んでいたら、あの得意満面の子どものいい表情を見ることはできなかつただろう。そのお母さんは、いわゆる善い絵本という固定観念から自由で、子ど

もが喜ぶのがとても嬉しいという原始の感性を豊かにおもちだつた。頭でっかちで大人から子どもへといふ「読み聞かせ」理解に疑問をもつきつかけになつたできごとだつた。

「おはなし农田に?」の後、帰国してカルチャーセンターや「祖師谷親子読書会」さらに附属幼稚園のブック・トークなどで、絵本の伝え手を細々続けてきた。そして、今はニューデリーの日本人学校幼稚園部で、同種の集いをしている。この二十年弱の絵本の伝え手体験のなかで、「読み聞かせ」から「読み合い」へと、明確に自分自身の意識が変わつた。



読み聞かせるのは親なのだが、子どもと親が同じ絵本を読み合う中で、親が確実に変わっていく。私も、読み聞かせて、子どもの感じ方に驚かされたことが幾度もある。例えば『はらぺこあおむし』(エリック・カール作、もりひさし訳、偕成社)を、毎晩繰り返し読んでいたことがあつた。ある夜、突然「おにいちゃん、こえ(れ)すぐちょうどよになるの?」と弟が聞いた。さなぎから蝶になるには、そのころ庭で毛虫とさなぎに魅せられた彼には、一ページ分では到底足りなかつたのだ。間もなく彼はこの絵本から卒業し昆虫図鑑に熱中し出した。

ブック・トークには、記録を自由意志で参加者に書いてもらつてきた。読んでもらう子どもの喜びはもちろんだが、子どもとのひとときを楽しんでいる親の様子がよくわかる。記録からは、教育のために「読み聞かせる」というよりも、子どもたちの反応に驚き、考える、学ぼうとする親の姿を強く感じて

きた。「読み合う」ことから、子どもを理解し、自分も成長する実感を得ているのだ。

読み合うことは喜びの共有体験

この、読み合うことが、喜びの共有体験になるには、三つの要因があるようだ。

一つは、絵本は、生を肯定しているということだ。自立しかつ共生できる人間などと教育の目標のようによくいわれるが、いずれも生を肯定しなければはじまらない。読んでもらう子どもが自分を重ねる絵本の主人公は、生まれたこと、生きていること、生きることを完全に肯定している。なんという安心感、励ましであろう。

日々が冒険の積み重ねである。乳幼児期、子どもたちは『はじめてのおつかい』（筒井頼子作、林明子絵、福音館書店）『こすすめのぼうけん』（ルース・エインワース作、堀内誠一絵、石井桃子訳、福音館

書店）『ちいさなヒッポ』（マーシャ・ブラウン作、内田莉莎子訳、偕成社）『はじめてのおるすばん』（しみずみちを作、山本まつ子絵、岩崎書店）などを、最後にほつとした溜め息が出るほど喜ぶ。「はじめて」の体験に伴う不安や困難を勇気を持って乗り越え、受け入れてもらうことを描いているので、主人公のように次に生きていく一步が歩めるのだ。

『さつちゃんのまほうのて』（たばたせい いちはか共同制作、偕成社）をはじめ障碍をテーマとする絵本は、「あるがまま」の尊さを、子どもにも大人にも伝えてきた。『ひろしまのピカ』（丸木俊作、小峰書店）は、絵の炎に熱さを感じ「生きていたい、戦争は嫌だ」と体を震わせて言った子どももいた。

近年増えている高齢者が登場する絵本も、『エマおばあちゃん』（ウェンディ・ケッセルマン文、バラ・クーニー絵、徳間書店）のように、個性的に生きる人間像が多い。『葉っぱのフレディ』（レオ・

バスカーリア作、みらいなな訳、童話屋）は生誕から死まで一貫して「存在」を肯定している。

絵本を読み合うのは親子で互いの生を肯定し合う機会が与えられているということなのだ。

一つ目は、子どもと同じ絵本を読み合うことで、子どもを発見し、その感性に添うことを学ぶことだ。多くの母親が「こんなことを言った」と驚いて喜んで報告する。『やあ、ともだち！』（クリス・ラシュカ作、泉山真奈美訳、偕成社）で、積極的にみえる「この黒人の子も友達がない子だ」と次男がつぶやいたという手紙を見る母親から受けたのは、

ブック・トーク後四か月たってからだった。

日常、子どもの行う言動をチェックして、注意し、指示し、命令することが多いので、子どもの内面を「聴く」機会が意外に少ないと親は反省する。

そして、この絵本にこんな感想を言つたと、わが子の感性に驚き感心し、その成長を喜ぶ。

三つ目は、「今、ここ」に本がある環境が、自然に、家庭内に文化的なうるおいをもたらす喜びだ。

最近父親の育児参加が喧伝されるが、父親が子どもと絵本を読み合うことが確実に増えているようで嬉しい。どうしても、接觸時間が限られるので、子どもとの会話が生まれやすい絵本の時間を親子とともに喜ぶようだ。豊かな内容をもつ絵本、絵画芸術でもある絵本は、開けばそこに次元の異なる時空があるので、日常レベルと違う、小さな虫一匹花一輪から宇宙まで、太古から未来までの自由な世界を私たちに与えてくれる。

ブック・トークが終わると、絵本の力でさわやかにまた優しい気持ちになつた親たちの笑顔を必ず見ることができる。絵本を伝える仕事は、だからやめられない。

（洗足学園短期大学・デリー大学）

友だちのひろがりを願つて

吉岡 晶子

以前担任したクラスの時、友だち関係で悩んだことがあった。一度できた仲間のつながりがとても強くてメンバーあまり変化がなく、そこに育つものはあるのだろうが逆に仲間と離れる怖さがあつて自分で自分を制約したり友だち関係が広がるきっかけを逃していたように思う。相手が変わることによつていろいろな肌合いの友だちとかか

わつてほしいし、いつもとは違う自分の気持ちや楽しさを感じてほしいと思っていたが、なかなかうまくいかなかつた。仲良しがいるのはいいけれど友だちが広がるとまた楽しい事があることを実感してほしいし、そうなるようにはどうしたらよいだろうと常々思つていた。

現在四歳児クラスを担任している。三年保育の

メンバーと二年保育のメンバーが混ざつており、仲良し二人組がいくつかあった。A子とB夫、C子とD子、E子とF子、G子とH子。たがいに支え合つていて、登園するとお互にさがしたり、いふことを確認したりする毎日で、「大好き」と言つたりしていた。大好きな人がいてそれで幼稚園が楽しくなるのは大事なことだし、それが基盤になるのもいいのかなと思いつつ、そこから仲間が増えて広がつてほしいと思つていた。

二学期になつてチャンスがやつてきた。A子とB夫に変化があらわれはじめ、それをきっかけにあちこちで友だち関係が動いてきたのである。

A子とB夫

A子とB夫の間ではB夫がA子を頼りぎみで、少しA子がそのことを負担に感じはじめてきていた。「B夫くん、ついてこないで」とはつきり

言つてゐることもあつた。B夫は「先生、遊ばう。A子ちゃんがだめだつて言うの」と少々なきないセリフを言つたりし、それでもB夫はA子のことが大好きなので「A子ちゃん、A子ちゃん」と声をかけていた。まだA子以外に声をかけようとか、かかわろうという気持ちはあまり見られなかつた。それでもだんだん自分の道を歩み始めてきた。まずは自分でやりたいことをやる。それから「先生、食べに来て」「先生、こんなのできたよ、一緒にやろう」と声をかけてきた。

B夫にとつてはここをどう乗り切つて新しい関係をつくつていくのか、とても大事なときである。人との出会いやかかわりがひろがるようになかしたいと思い、一緒に砂遊びをしてB夫が作るお団子やプリンやケーキを食べたりしながら、仲間が一人でも二人でもふえるようにしたりした。今まで砂場に大勢いてもA子に気持ちが向いて

いたのが、だんだんほかの人にも目がいくようになつてきて、大きな穴を掘つたり川を作つたりなどすることも変わってきた。また、ほかの友だちがしている事にも気付きはじめ、それまでしたことのないピストル作りや戦いごっこ、ガオレンジヤーボー、ウルトラマンごっこなどのキャラクターゴーつこもするようになり、しつかりメンバーの一員になつて園庭を走り回つていた。

C子とD子

A子は活発なC子と仲良くなり連日一緒に遊ぶようになつた。そしてC子とD子の関係にも変化が見られるようになつたのである。

C子とD子は三歳で入園し、ずっと腐れ縁ともいうような関係が続いていた。いつも一緒にいるわけではなく、おたがいに「C子ちゃんは?」「D子ちゃんは?」とさがして遊びはじめ

るが、そう長続きはせずにしょっちゅうけんかしてはなかおりしていた。

D子はC子がいることを支えとしていて、一人で遊んでいても誰かと遊んでいてもつまらなくなるとC子のことを思いだしてはさがしに行つていた。「入つていいよ」「来ていいよ」と来るものは拒まずで、自分のほうから友だちをすごく求めたり仲間に入れてもらおうとはあまりしようとはしなかつた。C子がA子と遊ぶようになつてD子はちょっととさみしさがあつたであろうがその時を一人でなんとかしようとしていた。絵本を見たりサッカーをしたり「先生、遊ぼう」と私のところに来りしていた。でも、D子はC子と遊びたいのではC子とA子が遊んでいるところにがんばつていれてもうようになつた。そこにはA子と遊びたいI夫がいたり、I夫と遊びたいJ夫がいたりしてメンバーが多いことがよくあり、D子は自然に

いろいろな人と関わるようになった。今までよりうまく行かない事やトラブルが起きてしまい大声で泣くことも増えたが、相手の言い分を伝えたり説明をすると状況が分かつて遊びをやめずその場に立ちとどまっていた。

「いれてって言つたら、いいよつて言つてくれた

の。すぐ一くうれしかった」と話していた。入園してから一年半もたつているが、D子の気持ちの変化が感じられる。やつと「自分のほうから」というのを意識して一步踏み出したのではないだろうか。

先日、D子は四人で舞台の上でリボンを持って踊っていた。今までほかの三人ともあまり遊んだことはなかつたし、ましてやそんなことをしたことはなかつた。四人は思いつきり体を動かして楽しそうだつたし、D子は終わつた時に「あーおもしろかった」と頬をピンク色にしていた。ただ、

この時も途中で突然「C子ちゃんを呼んでくる」と行こうとしたので「今途中だし、C子ちゃんはお外で遊んでいるから大丈夫よ」と声をかけると、くるつと向きを変えてまた踊り始めたということがあった。「でも…」と言わずよくもどつたと思う。

E子とF子

入園した時からの仲良しでいつも一緒に行動していた。E子はよくしゃべり、F子は無口で控え目。F子は自分の意思や考えはあるのにE子に気



をつかって合わせたり我慢しがちである。「F子ちゃんはどうしたいの?」「F子ちゃんは何がいいの?」など先ずF子に声をかけるようにしてみたが、F子はE子の顔をサッと見ることが多く、その様子が気になっていた。

十月になって二人に変化が見られるようになつた。E子がF子を捜したり後をついて行くよ

なつたのである。「先生、F子ちゃん知らない?

どこにもいないの」と言われ、一緒にさがしてもなかなか見つからない時には、F子のこれまでとは違う意思を感じたので、無理にさがさずに「このういうときは違う人と遊ぶ?」と言つたり、一緒に遊んだりすることにした。E子にとつてはつらい時期で涙をながしたこともあつた。そのうちにF子が誰かと遊んでいるところにE子が加わり、三人、四人と仲間がふえて来るようになつて來た。E子はお帰りの時にF子の隣に座れなくとも泣いたりせずにその状況を受け入れられるよう

なつた。F子もE子を避けてるわけではなく、E子との関係が以前より対等になつたようである。あまり二人の結びつきが強いと他からはかかわりにくさがあつたのだろう。この二人の関係がゆるやかになったことでF子と遊びたい人が増えてきた。A子もそうだしG子もその一人である。

G子とH子

G子はH子といつも一緒にいた。H子をリードする、世話をするという気持ちでいることで自分 の居場所を見つけていたように思える。そのG子もH子以外の友だちに気持ちが向き始め、H子と一緒にではあるがE子やF子と砂場で泥んこになつて遊び、四人でキャーキャー言いながら着替えた りしていた。それもまた楽しいのかそのようなことが数日続き、今までよりも戸外に出るようになり、体を動かすことが増えてきた。G子はF子と遊びたい、お弁当も食べたい、同じものを作りた

いなどH子との間での動きとは違つてきた。

G子の変化を感じたのかH子の様子も変わつてきた。朝来ると「きょうは一人で遊ぶ」と宣言してG子が誘つても断つたり、みんなでリレーをする時には「先生と走る」と言って一人では走ろうとしなかつた。何回か一緒に走つているうちに、つないだ手を離して一人で走るようになつたが、H子は今までのよろこし方のようにはいかないことへの葛藤を表していた気がする。なにか変わろうとしているのだがどうして良いのか見つからず葛藤しているH子に、「がんばれ！」という気持ちだつた。

ズルのようにメンバーが動いたが、それぞれに一步踏み出す準備ができていたのだろうし、安心できる友だちがいたことが基盤にあつたからだろう。だからこそ葛藤に立ち向かえたのではないだろうか。それぞれの大なり小なりの葛藤、そこを支えてあげることが大切なだろう。一步踏み出して乗り越えた体験がきっとこれから先にも自分から人ととかかわつたり、変わることに臆病にならないことにつながるだろう。

今回、B夫、D子、E子、H子も「先生！」と自分が困つている時にちゃんとサインを出してくれたので、私もこのチャンスを大事にしなければとかかわれたが、もつとこちらが先に気付いてあげなければならぬサインもあるだろう。それを見逃さないようにしてグラグラしている人を支え、友だち関係がひろがるようにしていきたい。
(お茶の水女子大学附属幼稚園)

H子との間での動きとは違つてきた。

G子の変化を感じたのかH子の様子も変わつてきた。朝来ると「きょうは一人で遊ぶ」と宣言してG子が誘つても断つたり、みんなでリレーをする時には「先生と走る」と言って一人では走ろうとしなかつた。何回か一緒に走つているうちに、つないだ手を離して一人で走るようになつたが、H子は今までのよろこし方のようにはいかないことへの葛藤を表していた気がする。なにか変わろうとしているのだがどうして良いのか見つからず葛藤しているH子に、「がんばれ！」という気持ちだつた。

ズルのようにメンバーが動いたが、それぞれに一步踏み出す準備ができていたのだろうし、安心できる友だちがいたことが基盤にあつたからだろう。だからこそ葛藤に立ち向かえたのではないだろうか。それぞれの大なり小なりの葛藤、そこを支えてあげることが大切なだろう。一步踏み出して乗り越えた体験がきっとこれから先にも自分から人ととかかわつたり、変わることに臆病にならないことにつながるだろう。

今回、B夫、D子、E子、H子も「先生！」と自分が困つている時にちゃんとサインを出してくれたので、私もこのチャンスを大事にしなければとかかわれたが、もつとこちらが先に気付いてあげなければならないサインもあるだろう。それを見逃さないようにしてグラグラしている人を支え、友だち関係がひろがるようにしていきたい。
(お茶の水女子大学附属幼稚園)



三回以下と少なく、拍子抜けするよ

うなものでした。一方で、文面から
数は少ないけれど毎日自分で作って
いる人がいることもわかりました。

今年私は、娘の中学校で広報委員
として、PTAの会報を作る活動に
参加しています。今回、その特集に
「お弁当」を取り上げることになり
全校生徒に「昼食に関するアンケー
ト」をとりました。

中学生をもつ親にとって、量は足
りているのか、どんなお弁当を作っ
てほしいのか、他の子のお弁当はど
んなものか、また、どのくらいの人
がどんな頻度で“買い弁（パンなど
を買ってお弁当にする）”をしてい
るのかなど、気になること、知りた
いことはたくさんありました。結果
は、半数以上がほとんど残さず食べ
ているし、買い弁も大半が一ヶ月に

幼児の教育

第一〇一巻 第二号

(一〇〇一年三月号)

定価五五〇円（本体五四四円）

発行 平成十四年三月一日

編集兼発行人 田代和美

発行所 日本幼稚園協会

〒112-8620 東京都文京区大塚二丁目

お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所 図書印刷株式会社

発売所 印刷所

〒108-8620 東京都港区三田五丁目二十一

ルとちくわのいそべあげのお弁当

ん」「日の丸弁当」「ごはんの上に梅

干しがあつて、おかずはミートボー

ルなど、いろいろな種類のお弁当、

“いつもがいちばん”“平凡だけど”

などの言葉を目にしていると、いま

どきの中学生にもある、堅実な一面

を見たように思いました。

(A)

☆ 本誌の購読のご注文は発売所フレ
ベル館にお願いいたします。

☆ 万一、乱丁・落丁などがございましたら、おとりかえいたします。

子どもの病気や事故について、その判断に迷った時の
よきバイブルとしてご活用ください。

子どもをもつ親・保育者・教師に贈る

最新刊

小児科医からの アドバイス

山田 真 著
(八王子中央診療所所長)

子どもが次のような症状の時、
保育者としてどう対処されていますか?

- ①子どもが熱を出した時、
登園できる目安は何度か。
- ②発疹が出たら
必ず園を休ませねばならないのか。
- ③「予防注射の当日や風邪をひいた時は、
風呂に入ってはいけない」は本当か。
- ④子どもの事故で
気をつけねばならないことは何か。

など、子どものからだと病気の基礎知識について、
困った時の対処法についてやさしく丁寧に解説します。

●主な内容

- 1章 うつる病気の基礎知識
ウイルスと細菌、免疫、うつる期間、
不顕性感染、再感染
- 2章 発疹の見分ける感染症
感染症の見分け方、突発性発疹と麻疹、風疹と水痘、手足口病と伝染性紅斑、溶連菌感染症
- 3章 その他の感染症
おたふくかぜ、マイコプラズマ肺炎、夏にはやる病気
- 4章 下痢、嘔吐、便秘
冬にはやる下痢と感染症、小球形ウイルス感染症、その他の下痢、嘔吐、便秘
- 5章 アレルギーによる病気
アレルギーとは、気管支ぜんそく、アトピー性皮膚炎
- 6章 子どもの発熱
発熱について、微熱、ひきつけ
- 7章 病気の症状
子どものせき、はなみずとくしゃみ、川崎病、繰り返し病、成長痛、子どもの問題行動、
リンパ節のはれ
- 8章 質問に答える
おねしょ、下半身の話、子どもの事故、入浴について、予防接種、安静について、食事について、出席停止基準、小児科医の心得



四六判 224ページ 定価：本体1,200円+税

キンダーブックの
フレーベル館



21世紀保育ブックス

これからの保育はどの方向へと向かっていくのか。

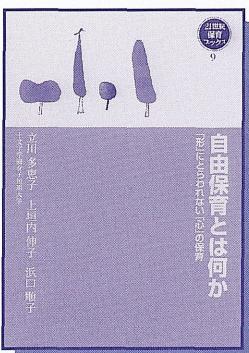
新しい21世紀の保育を展望しながら必要とされる諸問題を根本的に掘り起こし、確実に保育者を導き育て、将来の保育への指針を与える新シリーズ！

最新刊

編集委員 森上史朗（子どもと保育総合研究所代表）

柴崎正行（東京家政大学教授）

柏女靈峰（淑徳大学教授）



21世紀保育ブックス⑨

自由保育とは何か

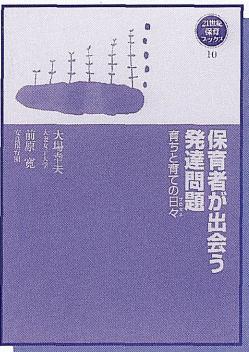
「形」にとらわれない「心」の保育

立川多恵子 上垣内伸子 浜口順子

十文字学園女子短期大学

近頃、青少年による問題行動の多発の要因として、幼児教育のあり方が取り沙汰されています。の中には「自由保育」が要因になっているのでは、という声もあります。この「自由保育」批判を耳にして立ち止まり、これまでの貴重な経験や豊富な実践事例、長年の歴史研究を通して、改めて「自由保育とは何か」を模索し、保育の本質に触れていきます。

B6判 184頁 定価：本体1,200円+税



21世紀保育ブックス⑩

保育者が出会う発達問題 育ちと育ての日々

大場幸夫 大妻女子大学 前原 寛 安良保育園

私たちが理解しようとしてきた発達は、子どもの育ちという現象を外から当てはめた尺度をもって計りにかけるような捉え方をしがちでした。保育所保育指針や幼稚園教育要領が改訂され、「発達の過程」を大事にするという方向へ進もうとしている現在でも、その姿勢を変えるのは容易なことではありません。一人ひとりの子どもの興味や関心、意欲などを、生活と共にしながら捉えて、育ちの発達にかかわっていくその道行きを大事にしながら、現実の保育の問題として「発達」について考えます。

B6判 208頁 定価：本体1,200円+税

既刊本

- | | | | |
|-------------------|--------------|------------------|--------------|
| ①新しい教育要領・保育指針のすべて | 森上史朗 著 | ⑤知的好奇心を育てる保育 | 無藤 隆 著 |
| ②新時代の保育サービス | 柏女靈峰・山本真実 共著 | ⑥保育者の「出番」を考える | 吉村真理子 著 |
| ③カウンセリングマインドの探究 | 柴崎正行・田代和美 共著 | ⑦地方自治体の保育への取り組み | 山本真実・尾木まり 共著 |
| ④子ども虐待の理解と対応 | 庄司順一 著 | ⑧乳幼児期の「心の教育」を考える | 阿部和子 著 |

<以下続刊>

キンダーブックの
フレーベル館